

受傷頻度(体質別)

○気候変動期の春秋では SE > WM
○WMの最も不調といわれる夏の午後及びSEの最も不調の秋の午前中に外傷が多い。
く、又、最も好調といわれる夏の午後及びSEの春の午後にも外傷が多い。(不

○冬では、行動が制限されるのか、特徴が明かでない。

○之等の諸点は各論篇で追究している。

十四、授業日に於ける外傷頻度(体質別)(第四図)

○四季を通じ、日曜日は授業日よりも多い。

○夏季と秋季では、SE・WMの曲線型が略々逆の型を示している。又春季は秋季と同一傾向の型を辿り、冬季は何れとも決し難い。

○各季節に於ける体質傾向の特徴の一端が窺われる。

以上総論篇の一部の成績、だから考察してみても、児童外傷、殊に微外傷を含めての外傷は、その各種要因との関連性、児童の性格差によって起ると思われる種々相を端的に物語っている点に深かい興味を覚える。即外傷又は災害事故発生の機序が個人の内部環境即、体質傾向と頗る緊密な関連を示している事実は、体質傾向究明に興味ある端緒を与えるものと言える。

終りに本調査は諏訪市教育委員会、諏訪市学校医会の委嘱により、豊田小、中学校全職員との共同研究として達成したものであり、その一部医学面を発表したに過ぎない事を附記する。尚体質評定その他は新潟大学小坂教授の御指導によるものである。

少児期に於ける体質究明 の一方策

長野県保育専門学院
竹村計美

我々の生活現象の平衡状態を保つ機能の中で重要なものの、一つに

自律神経系があり交感神経と副交感神経がその役割を果している。

又近来、内分泌特に脳下垂体副腎皮質系機能が生命現象即ち生体の順応機転に対して極めて重要な役目を果している事が明らかにされている。即ちこのホルモンは生活反応のあらはれである体質を支配する重要な要因の一つであると解せられる。

私はこゝに於て下垂体副腎皮質系機能の一示標とされている血液中の白血球の一成分である好酸球数のあり方、即ち増減を小児について動態的に観察し、その姿を通して下垂体副腎皮質ホルモンが小児体質の特徴に対して演ずる役割を考察した。

この内分泌機能の検査には好酸球数だけをもつてしてはもとより不充分であるが、ヒンクレマン氏直接検査法が簡易で且つ正確であることから多くの条件のもとに動態的な観察をなして、その様相は小児の体質を知るに好都合である。

検査対象とした小児は出生直後新生児、乳児、幼児、学童、中学生の男女に就いて健康児及び病児、なおその一部の家族に対して延べ数千人を行つたのであるが、今回は主として重点を市内保育園児の観察におき、その結果の一部を述べることにする。

この前にまず健康小児の好酸球数値についてのべて保育園児の年令的位置の特徴を鮮明にしたいと思う。小児期の冬期を比較する為に試みに秋季に於ける平均値をとりあげてみると成人は大体一五〇前後であり、なお体質によって夫々差異が認められる。

第一図によつて秋季に於ける小児期の年令的特徴を綜合観察してみると乳児二〇〇、幼児四五〇、学童三五〇、中学校二〇〇と一見して解かる様に、幼時期の好酸球数値が最も高位にあることが解か

る。一方小児体質の年令的特徴を考察するにあたかも幼児期はとりわけ過敏性でこの児期が疫病年令期といはれている。

小児の好酸球数値は年令あるいは季節などによって夫々特異の様相をあらはし静的断面だけですべてを判断することは出来ない。

第二図に示す如く幼児期の季節変動を見るに夏季の上昇が著しい差異があることを確認した。特に保育園の四五才の児の夏季好酸球数値の上昇が極めて著しい特徴がある。従つてあらゆる環境刺激に対して敏感に反応しそれに順応しようとする努力している年である事が明らかになった。この年令期の小児は夏季に於て疲病、自家中毒症、その他急激症状をおこし易いことが臨床的に経験される事実と一致する。以上は小児期全般からみた幼児期の特徴である。

更に保育園児の好酸球数の個人別分布態を示しその多少の実態を体质的に検討してみた。第三図(略)

平均曲線より分離して上位、下位にあるものは外部よりみて身体的に病氣でなく、普通と違った体質を示している。

○上位にあるもの：性格的に神経質に傾き湿疹もしやけ、喘息性気管支カタル、じんましん等に罹患し易く、夜尿症等を有し蛔虫等の害を受け易いもの。

○下位にあるもの：抵抗力の強いもの、即ち色々の悪い条件に対し打ち勝つ力のあるもの。

○異常にとび離れて上位、下位にあるもの：上位にあるもの：家族的に遺伝傾向のもの、特に異常体質が認められ、上記上位の異常の他になお熱性痙攣、自家中毒症、猩紅熱等に罹患しやすい。又性格等の異常が特に認められ、神経質で異常に過敏であり、我儘で一寸した事に怒り、又は呼び家庭の暴君となり易いものが多

く、ものごとにあきやすく、おちつきがなく、つかれやすい傾向を有する。

下位にあるものは遺伝的関係は認められない。以上の成績により各個人の体質の判定が可能となる解である。比の上位にある児に就いては特に注意を要するものであり、健康管理の重要な資料とすべき事が考えられる。

次に異常環境児の養護施設としての諏訪湖学園の児童四名に対して観察した。第四図(略)年令のすゝむにつれて減少の傾向とは逆に増加の傾向にあり、中学生の年令層に特に増加を認めた。これらの好酸球数値と児童相談所及び学園の先生の調べた心理学的調査とよく一致した。多いものは性格的には体質的に異常を認め、異常体质傾向が著明であった。

当施設の児童は一般に情緒的には内向性にして神経質傾向あり害ガリズ、湿疹、しもやけ、が多く夜尿症、アレルギー性傾向を認め、寄生虫罹患が多かった。残念ながら都合で遺伝的の傾向を調べることが出来なかつた。併し特別に增多のものは遺伝的傾向を有するものと推定される。なお兄弟共に增多を示している事実よりみても考えられる。異常環境が児童に与える影響の実態を把握し、正常環境児との特異的差異を確認し得た。

以上により小児の体質は遺伝的なものと環境的なものが作用し合つた結果創造された構え方であり、好酸球数の増減多少の実態により構え方の年令差、個人差を見出す事が出来た。依つてこの流血中の好酸球数測定は小児体質を光明する上に、又小児保健の実際に対して大いに価値ある一方策と考えられる。